

耕作放棄地4haでカヤ生産

1束800円でじゃんじゃん売れる

福井県小浜市中名田地区・森の郷なかなた産物組合

文：編集部 写真：森の郷なかなた産物組合、編集部



ただのススキも刈れば1束800円

「ここもカヤ場ですよ」

森の郷なかなた産物組合の事務局・西本吉右衛門さん（66歳）はそう言っていて、田んぼと畑の間の20aほどの空き地(?)を指差した。

7月下旬、見るとそこには1m50cmにもなる草たちが勢いよく、青々と繁茂している。「ほら、イネみみたいな細い葉っぱで、ポコポコっと株になってるのがありますでしょ。それがカヤ。つまりススキですわ。こいつが売れるんですよ」

産物組合の「カヤ場」は合計4haほど。以前はすべて田んぼで、耕作放棄地になっていたところだ。そこで今はカヤを育てている。といっても、別に管理は必要ない。耕耘もしないし、肥料もふらない。かん水も草刈りも何もせず、1年に1回、毎年秋に「カヤ刈り」をするだけだ。

刈り取ったカヤは束ねて乾燥させておくと、茅葺き屋根用に売れる。1束800〜1000円ほどで、文化財修復などの工事を請け負う業者が持っていくてくれるのだ。昨年の収

量は全部で1500〜1600束だったそうなので、売り上げはざっと計算して120万円以上になる。

茅葺き屋根業界はカヤ不足

森の郷なかなた産物組合は、2006年、文化庁と小浜市が建設した「小浜市ふるさと文化財の森センター」を管理・運営するための組織として発足。地域の農家20人が参加した。センターはもともと、国宝・重要文化財建造物などに使う檜皮ひわだの確保や普及啓発をする施設で、産物組合も檜皮に関する仕事をするはずだったのだが、いつの間にかカヤ生産をする組織になってしまった。きっかけは組合の研修。茅葺き民家が多く残る京都の美山町に行った際、「カヤが足りない」と聞いたことだった。

「茅葺き職人が、わざわざ福知山までカヤを刈りに行つとる言うとなんや」

そう話す組合長の中野幸男さん（81歳）も、じつは昔、茅葺き職人だった。昭和20年代後半まで、各地の屋根を葺いて歩いた。当時、カヤ場は集落の共有地や個人の持ち山に必ず



7月下旬のススキの株。ここ数年シカに新芽を食害されて、株が小さくなってきているのが悩みだ

あり、職人は屋根道具だけを持って現場に行けば、材料のカヤは集落の人たちが用意してくれていた。しかし最近では、集落にカヤ場を見かけなくなったし、文化財に指定されているような住民のいない古民家での仕事もある。職人自らカヤを準備しなくてはならないことが多く、その調達に苦労しているようなのだ。

産物組合はメンバーのほとんどが70歳以上で、茅葺き民家で暮らしたことがある人も多い。カヤは檜皮より馴染みがあるし「カヤ不足だというなら我々でカヤをやってみようか」という話に自然となった。

耕作放棄地が2年でキレイなカヤ場に

3 haほどまとまっている耕作放棄地にスキがたくさん生えていたので、まずはそこを組合のカヤ場にするにした。基盤整備はされておらず、大型の機械は入れない。担い手もおらず、もう4〜5年は水も入れられていなかった田んぼだ。日当たりはいいので、土はカチカチでひび割れ状態。

「カヤは水分が少ない原野みたいな土地のほうがよお生えるんや」と中野さん。さっそく副組合長とともに地主をまわり、刈り取りの許可をもらった。「放ったらかしの田の草を刈ってくれる」という話なので、断る人は当然だれもいなかった。

少しでもたくさん採れるようにと、最初は少し整備もした。まず夏に、ススキの株の間に生える他の雑草を刈り取った。すると、その後に出てくる雑草はススキの陰になって生

育が抑えられ、ススキが優占しやすくなった。さらに1年目に刈り取った後、密度が薄いところに株分けもした。

こうして2年もすると一面見事なススキ草原が出来上がった。もう耕作放棄地には見えなかったのだろう。黄金色に輝く穂が秋風に揺れる景色を見て、地主にも感謝されたくらいだ。

刈り払い機でカヤ刈りするコツ

カヤ刈りは、11月の終わりから2週間ほどかけて組合員総出で行なう。タイミングが重要で、「霜が降りて、雪の降る前やな。1回霜にあてるとカヤはシャキッとするんや。で

も雪が降ったらみな折れてしまうから、その前には終わらせる」と中野さん。時間との勝負だ。

このころのススキは高さ2m以上、枯れた株元も青いところに比べてかなり固くなっている。昔のように鎌で手刈りするのは大変なので、今は刈り払い機を使っている。刈る前にあらかじめススキの上のほうを束ねておけば、刈った後にバラバラに倒れてしまうこともない。経験を重ねるうちに、4〜5人が刈り、その他の人が束ねるという要領で効率よく作業できるようにしてきた。

「とにかく寒いし大変な作業。大勢でわいわいやしながらやるからできるんで」。休憩場所



秋のカヤ場。秋風に穂が揺れる景色は美しい



森の郷なかなた産物組合のメンバー。研修会で茅葺き屋根が数棟残る県内の宿場町跡に行った。前列中央が中野幸男組合長。後列左から3番目が事務局の西本吉右エ門さん